定本山頭火全集

第一巻

定本山頭火全集

第二巻

春陽堂版

定本　山頭火全集　第二巻

昭和四十七年四月二十五日　第一刷発行

著作者　種田山頭火

発行者　和田欣之介

東京都中央区日本橋通三ノ八

発行所　株式会社　春陽堂書店

印刷　三協美術印刷株式会社

製本　大口製本印刷株式会社

0395-200102-3066

凡　例

本全集の日記編は現存の自筆日記を忠実に翻刻することを旨とした。したがって、本文の表記は原文の文字遣いを尊重し、あえて用字用語の統一は行なわなかった。また、漢字体についてはおおむね現行の印刷漢字を使用した。

なお、読解の便を考慮して、左記の諸記号を使用した。

一、原文においては句読点はすべて「、」のみで、「。」印を使っていないが、行替えの末尾の「、」のみ「。」を以って示した。

二、草稿の誤記・脱字・誤字などには右傍に「マ、」印を付した。ただし、同一誤字については煩瑣をさけて、初出の場合にのみ限った。

三、酔余の乱筆などには殊に判読に苦しむものがある。□の欠字記号を付した箇所は、おおむねそうしたところである。

四、日記中に挿入されている俳句には、随所に✓、へ、――などの印を付したものが多い。これは作者の何らかの価値批判を示す符号と推定されるが、これらは一様に「・」印を付して示した。

五、明らかに削除している句であっても、それが前後の文意に関連を持つものについては、〔削除の印あり〕として掲出した。

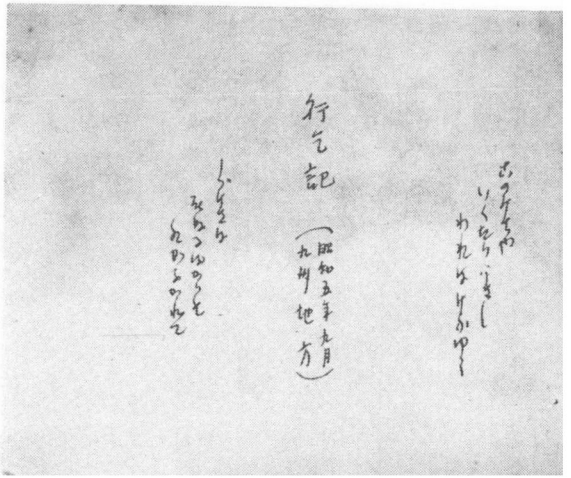
六、読解の上で必要ありと思われるものについては、〔　〕で囲んで、編者の注を付した。

目次

行乞記（一）……一
三八九日記……一七九
行乞記（二）……二一九
其中日記（一）……五三一
解説（大山澄太）……六二九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

行乞記（一）



〔自筆ノート〕その一　表紙は無記入、写真はその第一頁。昭和五年九月九日より十一月十六日に至る間の九州地方行乞記。これ以前のノートは焼却している。〕

〔昭和五年〕

このみちや
いくたりゆきし
われはけふゆく

しづけさは
死ぬるばかりの
水がながれて

九月九日　晴、八代町、萩原塘、吾妻屋（三五・中）

私はまた旅に出た、愚かな旅人として放浪するより外に私の生き方はないのだ。

七時の汽車で宇土へ、宿においてあつた荷物を受取つて、九時の汽車で更に八代へ、宿をきめてか

ら、十一時より三時まで市街行乞、夜は餞別のゲルトを飲みつくした。
同宿四人、無駄話がとり〳〵に面白かつた、殊に宇部の乞食爺さんの話、球磨の百万長者の慾深い話などは興味深いものであつた。

九月十日　晴、二百廿日、行程三里、日奈久温泉、織屋（四〇・上）

午前中八代町行乞、午後は重い足をひきずつて日奈久へ、いつぞや宇土で同宿したお遍路さん夫婦とまたいつしよになつた。
方々の友へ久振に――ほんたうに久振に――音信する、その中に、――
……私は所詮、乞食坊主以外の何物でもないことを再発見して、また旅へ出ました、……歩けるだけ歩きます、行けるところまで行きます。
温泉はよい、ほんたうによい、こゝは山もよし海もよし、出来ることなら滞在したいのだが、――いや一生動きたくないのだが（それほど私は労れてゐるのだ）。

九月十一日　晴、滞在。

午前中行乞、午後は休養、此宿は夫婦揃つて好人物で、一泊四十銭では勿躰ないほどである。

九月十二日 晴、休養。

入浴、雑談、横臥、漫読、夜は同宿の若い人と共に活動見物、あんまりいろ〳〵の事が考へ出されるから。

九月十三日 曇、時雨、佐敷町、川端屋（四〇・上）

八時出発、二見まで歩く、一里ばかり、九時の汽車で佐敷へ、三時間行乞、やつと食べて泊るだけいたゞいた。

此宿もよい、爺さん婆さん息子さんみんな深切だつた。

夜は早く寝る、脚気が悪くて何をする元気もない。

九月十四日 晴、朝夕の涼しさ、日中の暑さ、人吉町、宮川屋（三五・上）

球磨川づたひに五里歩いた、水も山もうつくしかつた、筧の水を何杯飲んだことだらう。

一勝地で泊るつもりだつたが、汽車でこゝまで来た、やつぱりさみしい、さみしい。

郵便局で留置の書信七通受取る、友の温情は何物よりも嬉しい、読んでゐるうちにほろりとする。

行乞相があまりよくない、句も出来ない、そして追憶が乱れ雲のやうに胸中を右往左往して困る。

……

一刻も早くアルコールとカルモチンとを揚棄しなければならない、アルコールでカモフラージした私はしみ〴〵嫌になつた、アルコールの仮面を離れては存在しえないやうな私ならばさつそくカルモチンを二百瓦飲め（先日はゲルトがなくて百瓦しか飲めなくて死にそこなつた、とんだ生恥を晒したことだ！）。

呪ふべき句を三つ四つ

蟬しぐれ死に場所をさがしてゐるのか

・青草に寝ころぶや死を感じつゝ

毒薬をふところにして天の川

・しづけさは死ぬるばかりの水が流れて

熊本を出発するとき、これまでの日記や手記はすべて焼き捨てゝしまつたが、記憶に残つた句を整理した、即ち、

・けふのみちのたんぽゝ咲いた

・嵐の中の墓がある

炭坑街大きな雪が降りだした

□

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

・朝は涼しい草鞋踏みしめて
　炎天の熊本よさらば
・蓑虫も涼しい風に吹かれをり
　熊が手をあげてゐる諸の一切れだ（動物園）
・あの雲がおとしたか雨か濡れてゐる
・さうろうとして水をさがすや蜩に
・岩かげまさしく水が湧いてゐる
・こゝで泊らうつく〳〵ぼうし
・寝ころべば露草だつた
・ゆふべひそけくラヂオが物を思はせる
・炎天の下を何処へ行く
・壁をまともに何考へてゐた
・大地したたしう投げだして手を足を
・雲かげふかい水底の顔をのぞく
・旅のいくにち赤い尿して
・さゝげまつる鉄鉢の日ざかり

単に句を整理するばかりぢやない、私は今、私の過去一切を清算しなければならなくなつてゐるのである、たゞ捨てゝも〳〵捨てきれないものに涙が流れるのである。

私もやうやく『行乞記』を書きだすことが出来るやうになつた。——

私はまた旅に出た。——

所詮、乞食坊主以外の何物でもない私だつた、愚かな旅人として一生流転せずにはゐられない私だつた、浮草のやうに、あの岸からこの岸へ、みじめなやすらかさを享楽してゐる私をあはれみ且つよろこぶ。

水は流れる、雲は動いて止まない、風が吹けば木の葉が散る、魚ゆいて魚の如く、鳥とんで鳥に似たり、それでは、二本の足よ、歩けるだけ歩け、行けるところまで行け。

旅のあけくれ、かれに触れこれに触れて、うつりゆく心の影をありのまゝに写さう。

私の生涯の記録としてこの行乞記を作る。

……

九月十五日　曇后晴、当地行乞、宿は同前。

けふはずゐぶんよく歩きまはつた、ぐつたり労れて帰つて来て一風呂浴びる、野菜売りのおばさんから貰つた茗荷を下物に名物の球磨焼酎を一杯ひつかける、熊本は今日が藤崎宮の御神幸だ、飾馬

のボシタイ〳〵の声が聞えるやうな気がする、何といつても熊本は第二の故郷、なつかしいことにかはりはない。

あはれむべし、白髪のセンチメンタリスト、焼酎一本で涙をこぼす！

この宿はよい、若いおかみさんがよい、世の中に深切ほど有効なものはない、それにしても同宿の支那人のやかましさはどうだ、もつと小さい声でチイ〳〵パア〳〵やればよいのに。

鮮人はダラシがないことは日本人同様、ツケアガルことは日本人以上、支那人は金貯め人種だ、行商人の中で酒でも飲んでゐる支那人をみたことがない。

昨夜は三時まで読書、今夜もやつぱり寝つかれないらしい。

九月十六日

曇、時雨、人吉町行乞、宮川屋（三五・上）

けふもよく辛抱した、行乞相は悪くなかつたけれど、それでも時々ひつかゝつた、腹は立てないけれど不快な事実に出くわした。

人吉で多いのは、宿屋、料理屋、飲食店、至るところ売春婦らしい女を見出す、どれもオツペシヤンだ、でもさういふ彼女らが普通の人々よりも報謝してくれる、私は白粉焼けのした、寝乱れた彼女からありがたく一銭銅貨をいたゞきつゝ、彼女らの幸福を祈らずにはゐられなかつた、——不幸な君たち、早く好きな男といつしよになつて生の楽しみを味はひたまへ！

今夜はさびしい、広い二階に飴売の若い鮮人と二人きりである、彼は特におとなしい性質で好感が持てる、田舎まはりの仲買人から、百姓衆の窮状を聞かされた、此旧盆を迎へかねた家が多いさうな、此辺の山家では椎茸は安いし藕は安いし、どうにもやりきれないさうな、桑畑をつぶしてしまひたいけれど、役場からの慰撫によつて、やつと見合せてゐるさうな、また日傭稼人は朝から晩まで汗水垂らして、男で八十銭、女で五十銭、炭を焼いて一日せい〳〵二十五銭、鮎（球磨川名産）を一生懸命釣つて日収七八十銭、――なるほど、それでは死なゝいだけだ、生きてゐる楽しみはない、――私自身の生活が勿躰ないと思ふ。

向ひのラヂオが賑かだ、どこからかジヤズのリコードが響いてくる、ジヤズ〳〵ダンス〳〵、田舎の人々でさへもう神経衰弱になつてゐる。

都会のゴシツプに囚はれてはゐなかつたか、私はやつぱり東洋的諦観の世界に生きる外ないのではないか、私は人生の観照者だ（傍観者であらざれ）、個から全へ掘り抜けるべきではあるまいか（たまたま時雨亭さんの来信に接して考へさせられた）。

鰯の新らしいのを宿のおかみさんに酢漬にして貰つて一本いたゞく、鰯が五銭、酢醤油が二銭、焼酎が十三銭。

一昨夜も昨夜も寝つかれなかつた、今夜は寝つかれるいゝが、これでは駄目だ、せつかくアルコールに勝てゝも、カルモチンに敗けては五十歩百歩だ。

二三句出来た、多少今までのそれらとは異色があるやうにも思ふ、自惚かも知れないが。——

・かな〳〵ないてひとりである

一すぢの水をひき一つ家の秋

・焼き捨てゝ日記の灰のこれだけか

今日は行乞中悲しかつた、或る家で老婆がよち〳〵出て来て報謝して下さつたが、その姿を見て思はず老祖母を思ひ出し泣きたくなつた、不幸だつた——といふよりも不幸そのものだつた彼女の高恩に対して、私は何を報ひたか、何も報ひなかつた、たゞ彼女を苦しめ悩ましたゞけではなかつたか、九十一才の長命は、不幸が長びいたに過ぎなかつたのだ（彼女の老耄と枝柿との話は哀しい）。

九月十七日

曇、少雨、京町宮崎県、福田屋（三〇・上）

今にも降り出しさうな空模様である、宿が落着いてゐるので滞在しようかとも思ふたが、金の余裕もないし、また、ゆつくりすることはよくないので、八時の汽車で吉松まで行く（六年前に加久藤越したことがあるが、こんどは脚気で、とてもそんな元気はない）、二時間ばかり行乞、二里歩いて京町、また二時間ばかり行乞、街はづれの此宿に泊る、豆腐屋で、おかみさんがとてもいゝ姑さんだ。こゝには熱い温泉がある、ゆつくり浸つてから、焼酎醸造元の店頭に腰かけて一杯を味ふ（諸焼酎である、このあたり、焼酎のみでなく、すべてが宮崎よりも鹿児島に近い）。

このあたりは山の町らしい、行乞してゐると、子供がついてくる、旧銅貨が多い、バットや胡蝶が売り切れてゐない。

人吉から吉松までも眺望はよかつた、汽車もあえぎ〳〵登る、桔梗、藤、女郎花、萩、いろんな山の秋草が咲きこぼれてゐる、惜しいことには歩いて観賞することが出来なかつた。

なんぼ田舎でも山の中でも、自動車が通る、ラヂオがしやべる、新聞がある、はやり唄が聞える。

……

宮崎県では旅人の届出書に、旅行の目的を書かせる、なくもがなと思ふが、私は「行脚」と書いた、いつぞや、それについて巡査に質問されたことがあつたが。

今日出来た句の中から、——

はてもない旅の汗くさいこと

・このいたゞきに来て萩の花ざかり

山の水はあふれ〳〵て

・旅のすゝきのいつ穂にでたか

・投げ出した足へ蜻蛉とまらうとする

ありがたや熱い湯のあふるゝにまかせ

此地は県政上は宮崎に属してゐるが、地理的には鹿児島に近い、言葉の解り難いのには閉口する。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com